

ディスコース概念の再考

—Van Dijk 及び Fairclough の言説概念の検討—

A Review of the Concept of Discourse

—Focusing on the difference between the perspectives of Van Dijk and Fairclough—

中西 満貴典

NAKANISHI Mikinori

Abstract

The aim of this study is to reconsider the concept of 'discourse', spotlighting the viewpoints of the paradigm of Critical Discourse Analysis (CDA). 'Discourse' has been diversely defined by leading theorists depending on their disciplines, such as linguistics, sociolinguistics, and sociology including ethnomethodology or Foucault's theory of knowledge / power.

First, we review lexical meaning of 'discourse' as it is defined in various dictionaries. Then, we outline various sociolinguistic definitions of the term in reference to Discourse Analysis. The main discussion consists of two parts which deal with the frame of reference in CDA. The first examines Van Dijk's concept of 'discourse' and the second reviews Fairclough's argument that 'discourse' is language use conceived as social practice.

Keywords: 言説、談話、批判的ディスコース分析(CDA)、Van Dijk、N. Fairclough

1. はじめに

言語と社会の関係を記述する学問分野として社会言語学等がすでに存在している。その一方で、言語あるいは言語使用のなかに埋め込まれた社会的な不平等や差別といった側面にとくに注目して言語と社会を論じる分野としてクリティカル・ディスコース・アナリシス(Critical Discourse Analysis)が 1980 年代後半くらいから欧州の学者を中心におこなわれ始めた。日本でもそれは「批判的ディスコース分析」、「批判的談話分析」、「批判的言説分析」あるいは CDA という呼称で 1990 年代から盛んに研究がすすめられている。

ここで用語として「ディスコース」(discourse)が使用されているがその語の訳語として「談話」あるいは「言説」が与えられている。これらの訳語は大きく分けて次の二つの学問分野から派生している。「談話」は言語学系、「言説」は社会学系で好んで使用される。一般に、「言語と社会」の事象のうち「言語」あるいは「社会」のどちらかに重点をおいて研究がおこなわれ両者はけっして互いに接近することのない深い乖離が横たわっているようである。「談話」の訳語は言語学の一分野としての社会言語学の範疇にある「談話分析」で使用される一方、「言説」という訳語は M・フーコーの知／権力論の言説概念を連想させる。本研究は 'discourse' の概念についてメタレベルで吟味する位置にあるゆえ 'discourse' の訳語はそのどちらにも傾斜するこ

となくそのままの語（「ディスコース」）を用いる。

「ディスコース」という用語が呈する広範な概念の射程をとらえることは極めて困難な仕事であると考え。その概念を定義したりその議論の範囲を論じたりすることじたいが大きな研究になりうるからである。しかし、「ディスコースとは何か」を問うことなく論をすすめていくことは危険な陥穽が待ち受けることに留意しなければならない。鍵概念を呈する用語の吟味なしにテキスト等の分析をおこなうことは表層的な分析に陥ることになりかねない。とくに批判的ディスコース分析に携わる者にとってその分析の対象になっているはずの「ディスコース」の範囲についてある程度の論考をおこなうべきであろう¹。批判的ディスコース分析そのもののディシプリンが拡散的で多様な性質を帯びている²。本研究では私たちが前提にしてしまっていることや自明視してしまっていることを反省的に吟味し直すという観点からディスコース概念について再考していきたい。それによって批判的ディスコース分析の方法論に厚みを加えていくことの一助になればさいわいである。

本稿の構成は、初めに「ディスコース」の辞書的意味を概観したのち社会言語学で規定されるディスコース概念について検討する。その後、批判的ディスコース分析の主要な論者である Teun A. van Dijk と N. Fairclough のディスコース観について考察をおこなう。

2. 「ディスコース」の辞書的定義

ディスコース概念がどのようなものであるかを明確にするための定義を見いだすことは、そのタームの特性が可塑性、遍在性あるいは交換可能性を帯びるゆえ易しいことではない³。また、「ディスコース」が日本語で「言説」あるいは「談話」とそれぞれ訳され、それらが日常のおよび学問的な使用場面で意味が異なることも混乱に拍車をかけている。小論でディスコース概念を扱うに当たり最初にすべきことは辞書の定義を概観することであろう。辞書に記されている語の定義はその語の概念を必ずしも包括的に示すものではないが、議論の取り掛かりの端緒を見いだす助けにはなるだろう。まず、国語辞典で「言説」はどのように書かれているか。それは、「ことばで説くこと。また、その説」と記されている(『広辞苑』第5版)。また、「談話」については、「①はなし。ものがたり。会話。例「談話室」②ある事柄についての見解などを述べた話。例「首相談話」と定義され、基本的には日常的(社会的、政治的を含む)な使用を想定しており、学問的な文脈での使われ方の意味を示してはいない。

次に英和辞典による「ディスコース」(discourse)の概念を探る。名詞の訳として次の4つが挙げられている(『ジーニアス英和大辞典』大修館書店)。

- 1 講演; 講話、説教(lecture); 論説、論文
- 2 口頭伝達; 会話、談話(conversation)
- 3 [言語]話法(narration); 談話、言説《文・発話の有機集合体》
- 4 《古》推理能力; 思考力; 合理性

1の訳語は可算名詞で、それ以外は不可算名詞である。ここで注目するのは「談話」と「言説」の二つの訳語である。「談話」は2および3の両方で示され、2は日常的な会話(conversation)としての談話を意味し、3は言語学のタームとしての「談話」である。この訳語は一般的な場面および特定の学問的文脈の両方で使用されるため使い方に注意が必要である。「談話」ということばはほとんど誰でも知っている日本語なのであらたまって定義することなく使用される。一方で、言語学では「談話」といえば「談話分析」の「談話」を指すので同様にあらたまった定義がおこなわれない傾向にある。もう一つの注目すべき訳語「言説」については《文・発話の有機集合体》という説明が付けられている。ここで理解を困難にさせているのは「有機集合体」という語句が示す概念である。ことばの次元における話で「有機的」とは何か。『広辞苑』で定義された「ことばで説くこと。また、その説」が表象する概念と「有機集合体」としての言説概念との結びつきが円滑にいかないところにこの訳語の難しさがある。

次に、*The Oxford English Dictionary* [Second Edition]による‘discourse’の定義を概観する。その語(‘discourse’)は古フラ

ンス語(Old French)の‘discours’に由来しラテン語の‘discursus’(‘running to and fro’の意)に起源をもつ⁴。以下、‘discourse’の主だった定義を列挙する。

1. onward course; process or succession of time, events, actions, etc.
2. the act of the understanding, by which it passes from premises to consequences
3. communication of thought by speech; ‘mutual intercourse of language’
4. narration; a narrative, tale, account
5. a spoken or written treatment of a subject, in which it is handled or discussed at length; a dissertation, treatise, homily, sermon, or the like
6. a. familiar intercourse, familiarity
b. familiarity with a subject; conversancy
7. comb.
8. special comb.; discourse analysis

Linguistics, a method of analyzing the structure of texts or utterances longer than one sentence, taking into account both their linguistic content and their sociolinguistic context; analysis performed using this method

学問上の専門用語としての‘discourse’への言及は8番目に記されているがその場合の‘discourse’そのものの規定は‘the structure of texts or utterances longer than one sentence’というように「文以上の長さのテキストや発話の構造」のことを指す。また、OEDで言及されているように‘discourse’が仏語に由来するものであることを考えれば仏和辞典でその定義を見ることは何らかの参考になるかもしれない。以下、仏和辞典による定義を示す⁵。

1. 演説; スピーチ、挨拶; 説教; (弁護士の) 口頭弁論
2. 《蔑》(行動・事実・証拠を伴わない) 空言; 駄弁、長たらしい話
3. 《やや古》話(はなし)、言葉
4. [文法]話法
5. 【語】言述、言説、談話、話(わ) [langue の対]
6. (思想としての) 言説; 《哲、論》論述[事物についての論理表現 intuition の対]
7. (論文の題名として)...論

注目すべきは、仏語辞典での定義には「言説」の訳語が二箇所(5番目および6番目の項目)で記されていることである。一つは言語学の用法としての「言説」でありもう一つは「(思想としての) 言説」である。それはフランス語圏での「ディスクール」(discours)概念は、M・フーコーが知・権力論において提示した言説編制概念の痕跡の現れであると考えられる。

3. 「談話分析」(社会言語学)におけるディスコース概念

本節での、ディスコース、言説、談話概念についての考察は学問分野での使用に限定する。これらの単語が日常的な使用と学問的文脈での使用ではそれぞれ定義域が異なること、そして「談話」については広く一般的に使用される語(遍在性を帯びている)ゆえ、学問領域でのその語の定義との乖離はわたしたちに誤解を与える原因にもなりうる。さらに、複雑なことに、一口に学問分野といってもそれが一様でなく互いのディシプリンが根本から違っていることに起因するディスコース概念の複雑性がある。野呂(2001:22)は「ディスコース」へのアプローチをさまざまな学問分野による違いを提示している。例えば、言語学から「テキスト言語学」、哲学から「発話行為論」や「語用論」、文化人類学から「ことばの民族誌」、「インターアクションの社会言語学」(言語学、文化人類学、社会学に依拠)、そして社会学から「会話分析」などを紹介している。また、他方では「構築主義」の有用な方法論の観点からもディスコース分析に関心が向けられ分類されている(赤川, 2001:65)。Fairclough(1993:134)は、「ディスコース」が社会学者(social theorists and analysts)と言語学者(linguists)それぞれによって使用される領域の語であると指摘する⁶。また Schiffrin(1994:20-41)は「discourse」を、文を超える単位としての言語(language above sentence)[Stubbs(1983)]や言語使用(language use)[Fasold(1990), Fairclough(1989)]、さらには発話(utterances)[Hurford and Heasley(1983)]としてとらえる学問領域を紹介している。

Fairclough(1993)が示すようにディスコース概念が社会学あるいは言語学それぞれにおいて異なっている様態について具体的に考察をおこなう。はじめに言語学の扱いについて吟味する。ここで言語学というのは社会言語学のことを表し、狭義には「談話分析」を指す。「談話分析」という語が示すように「discourse」というタームに「談話」という訳語を与えている。それでは社会言語学では「談話分析」や「談話」の概念をどのようにとらえているのだろうか。スタップズ(1989:2)はそのような語句について以下のように記述している。

「談話分析」(discourse analysis)という用語は極めてあいまいである。本書では、私はこの用語を主に「自然に生じた、連続体をなす音声言語及び書記言語による談話の分析」の意味に用いることにする。大まかに言って、それは文(sentence)あるいは節(clause)の上のランクに位置する言語構造の研究、従って、会話における言葉の交換とか書かれたテキストといった、より大きな言語単位の研究を指す。それゆえ、談話分析は社会的文脈における言語使用、特に話し手間の相互作用(interaction)、即ち、対話(dialogue)をも扱う。

スタップズによる「談話分析」および「談話」に関する説明は次の4点に集約される。(1)「談話分析」という用語は極めてあいまい。(2)「談話」を「自然に生じた、連続体をなす音声言語及び書記言語(傍点は筆者による)」ととらえる。(3)具体的には、「談話」を「文(sentence)あるいは節(clause)の上のランクに位置する言語構造」、つまり「会話における言葉の交換とか書かれたテキスト」としてとらえる。(4)その「談話」とは「社会的文脈における言語使用(傍点は筆者)」を指す。

(1)については、スタップズが「談話分析」という用語は極めてあいまいと指摘するが、正確には「談話分析」というよりも「談話」('discourse')という用語の概念があいまいであるといえる。それでも学としての社会言語学を成り立たせるためには、分析の対象となる概念の定義が必要である。そこで、(2)および(3)で抽出したように、「談話」を「自然に生じた、連続体をなす音声言語及び書記言語、つまり文(sentence)あるいは節(clause)の上のランクに位置する言語構造(the organization of language above the sentence or above the clause)[Stubbs, M. (1983:1)]と定義しているが、これもあいまいな記述であることは否めない。その理由として、一つは、「自然に生じた」というが、言語やことばのやりとり、あるいは談話といえるものが自然に生じたものとして把握する行為と、(4)で言及したように、そのような言語使用が社会的文脈におけるものであるという言及は矛盾するものではないだろうか。なぜならば、スタップズがいうように談話が社会的文脈から生じたものであるとすれば、(3)で示したように会話における言葉や書かれたテキストがエンコーディングされる場面では必然的に人間を取り巻くなんらかの社会的な要素(文化、慣習、あるいはイデオロギー)が作用し、談話がそのような社会的な要素とは独立して自律的に自然に生じるとはいえないからである。「談話」の定義に関する二つ目のあいまい性は、「談話」を「文(sentence)あるいは節(clause)の上のランクに位置する言語構造」と規定している点である。それが具体的には「会話における言葉の交換とか書かれたテキスト」としてとらえられるのであるが、その定義が示す談話概念の射程は際限なく広がってしまうのではないか。社会的な要素を捨象した言語学の中での議論であれば、ある程度閉じた系の中で厳密に「談話」の範囲を規定し談話分析なるものをおこなうことは可能であると思われる。しかし、「談話」を社会的文脈にまで拡張して記述しようとするならば、言語や言語使用あるいは言語記号に関するエンコーディング/デコーディングの際に起こりうる社会的な力の作用を考慮しつつ「談話」の位相を見定めなければならぬ議論になってしまうだろう。

以上、「談話分析」のディスコース概念について批判的な検討をおこなってきたが、それは「言語と社会」の関係についての考察に関与する社会言語学の視点にかかわるものである。社会言語学は言語や知識との関連における権力論(ことばと権力、

ことばの使用と権力、あるいはことばと差別・偏見等)にまで踏み込んで必ずしも議論の対象にするものではない。しかし、言語と社会との関係を論じていくに当たり、その「社会」のなかにうごめく権力闘争(ことばをめぐる闘争、あるいはことばの陣地取りをめぐる闘争も含む)を捨象した次元の「社会」を想定して「言語と社会」を論じてゆくならばディスコース概念は限りなく言語学のパラダイムにおさまっていくのは自然なことと思われる。次節では、そのような「談話分析」の伝統を引き継ぎながらも社会の不平等を言語の観点から切り込んでいく批判的ディスコース分析におけるディスコース概念を検討する。

4. 批判的ディスコース分析におけるディスコース概念

4. 1. Van Dijk のディスコース概念

クリティカル・ディスコース・アナリシス(以後CDA)の主要な論者はT. A. van Dijk(以後ダイク⁷⁾)とN. Fairclough(以後フェアクラフ)である。両者とも言語と社会の場における‘discourse’を論考するものであるが小論ではその「ディスコース」観を個々に検討する。はじめにダイクの「ディスコース」概念について概観する⁸。ダイクの「ディスコース」あるいはCDAに関する態度が鮮明に現れている記述を4点にまとめて以下に示す(Van Dijk, 1998:193-4)。

(1) In order to understand how ideology relates to discourse, let me first summarize my discourse theoretical framework, especially since this is somewhat different from others that study both discourse and ideology, such as the more philosophical approach by Foucault(p.193).

ダイクはこの書(*Ideology : a multidisciplinary approach*)のなかでイデオロギーとディスコースとの関係の論考を試みるのであるが、まずは、最初に「ディスコース」概念についての規定をおこなう。ダイクも認めるところであるが、彼の「ディスコース」概念はM・フーコーのそれと異なるのである。この陳述はのちに詳論するフェアクラフの立場と対照的なものである。

(2) In the everyday practice of discourse studies, however, we often also use a more restricted primary meaning of 'discourse'. In that case, we abstract the verbal dimension of the spoken or written communicative act of a communicative event, and usually refer to this abstraction as talk or text(p.194).

ダイクは「ディスコース」を、話されたり書かれたりしたコミュニケーション行為の言語使用に関する次元(verbal dimension)のものとして要約するのである。つまり、「会話やテ

クスト」としてディスコースを見立てるのである。

(3) That is, in this sense, 'discourse' is rather being used to refer to the accomplished or ongoing 'product' of the communicative act, namely, its written or auditory result as it is made socially available for recipients to interpret. 'Discourse' in that case is the general term that refers to a spoken or a written verbal product of the communicative act(p.194)..

ディスコースはコミュニケーション行為の産物(product)であり結果(result)である。換言すれば、ディスコースは読み手や聞き手が解釈のために社会的に使用できるようになっているゆえ書かれたり耳にしたりしたものの結果である。

(4) In the same way as linguists abstract grammatical properties from actual verbal utterances, discourse analysts do so when they describe, for example, gestures, intonation, pauses, repairs, graphical design, narrative structures, metaphors, turns, closing sequences, and so on(p.194)..

言語学者が実際のことばによる発話の文法的特質を抽出するのと同じように、ディスコース分析者も例えば身振り、抑揚、句切り、修復、グラフィックデザイン、談話構造、メタファー、発話順番、終了発話などを記述する場合その文法的性質を引き出すのである。つまり、ディスコース分析も言語学者の方法論と同様に文法的な特性分析に関心を抱くのである。

上記(1)～(4)においてダイクのディスコース概念あるいはディスコース分析の方法論が要約される。イデオロギーへの考察をおこなうに当たり、ダイクはフーコーの方法をとらずあくまでも言語学の範疇に「ディスコース」概念をとどめておき、批判的ディスコース分析はテキスト分析あるいは文法解析等言語学的方法論に依拠した性格を帯びているのである。

ダイクは、「CDA とは何か」「CDA の目的は何か」という問いに対して以下のように答えて、他のディスコース分析の立場との違いを際立たせている。(Van Dijk, 1993)。

(5) In general, the answers to such questions presuppose a study of the relations between discourse, power, dominance, social inequality and the position of the discourse analyst in such social relationships (p. 249).

(6) Unlike other discourse analysts, critical discourse analysts (should) take an explicit sociopolitical stance: they spell out their point of view, perspective, principles and aims, both within their discipline and within society at large (p.252).

引用(5)で示すとおり、「CDA とは何か」等の問いに対して、ディスコースや権力、支配および社会的不平等とそのような社会関係におけるディスコース分析者の位置とのあいだの関係に関する研究を想定している。また引用(6)では、他のディスコース分析研究者（社会言語学の範疇における「談話分析」研究者）とは違って、批判的ディスコース分析の研究者は明確な社会政治的立場をとる（べきである）と述べ、具体的にはみずからの学問領域と社会全般の両方のなかでその視点、原則および目標を詳細に記述するのである。このようにダイクは CDA 研究に関わる者を社会政治的立場にコミットすることを促しつつ、その分析方法は引用(4)で示されたように言語学的手法をとるのである。それもディスコース分析といいながらも限りなくテキスト分析に類似する方法論をとるのである。ポストモダンのディスコース研究においては多義性、あいまいさに焦点がおかれる傾向にあったが、ダイクはディスコース分析に集中し、それも言語学の方法論の次元に限定したもので、つまり社会構造などの分析を排除することになった(p.197)⁹。

このようにダイクの CDA 観の特徴は一つには、いわゆる「談話分析」の意識とは違って社会政治的な問題（社会的不平等、権力、支配等）に対する強い関心を抱くことである。社会言語学は社会と言語の関係を記述するものであるが、そのディシプリンに属する「談話分析」は社会的な文脈に射程を広げながらも権力、イデオロギーといった領域まで決して踏み入れないのがある種の学問的慣習であった。それゆえ、ダイクの CDA は言語分析と社会の諸問題を結びつける試みであり日本でもマイノリティの問題としての CDA によるジェンダー研究がおこなわれた（斉藤 1998）。そして、ダイクの CDA 研究のもう一つの特徴は、その方法論において基本的に M・フーコーの知/権力論のような認識論的、哲学的方法によるものではなく、あくまでも言語学的（文法的）関心にもとづくものである。

ダイクの CDA の方法論のさらなる特徴は認知的概念の導入である。言語と社会と人間のあいだを介在する媒体として「認知」というパラメーターを使用した。「イデオロギーは経験にもとづく知識によるものである（認知的なものである）」（‘Ideologies are cognitive’. [Van Dijk (1995:244)]）あるいは、「イデオロギーは社会認知的なものである」（‘Ideologies are sociocognitive’ [p.245]）と述べている。ダイクはディスコースと認知の関係態を右の図 1 のように図示した¹⁰。それによればディスコース概念は「コンテキストや相互作用」あるいは「社会構造」に包含されるものとして位置づけられている。また、ディスコース概念は言語的な特性(properties)を表象するものであり、それとは別次元にあるものとして想定した認知的概念(cognition)を導入し、ディスコースと連関するものとしてみなされている。その認知的な概念は個人的なもの(personal cognition)と社会的なもの(social cognition)に分けられイデオロギ

ーは後者のなかに位置づけられる。

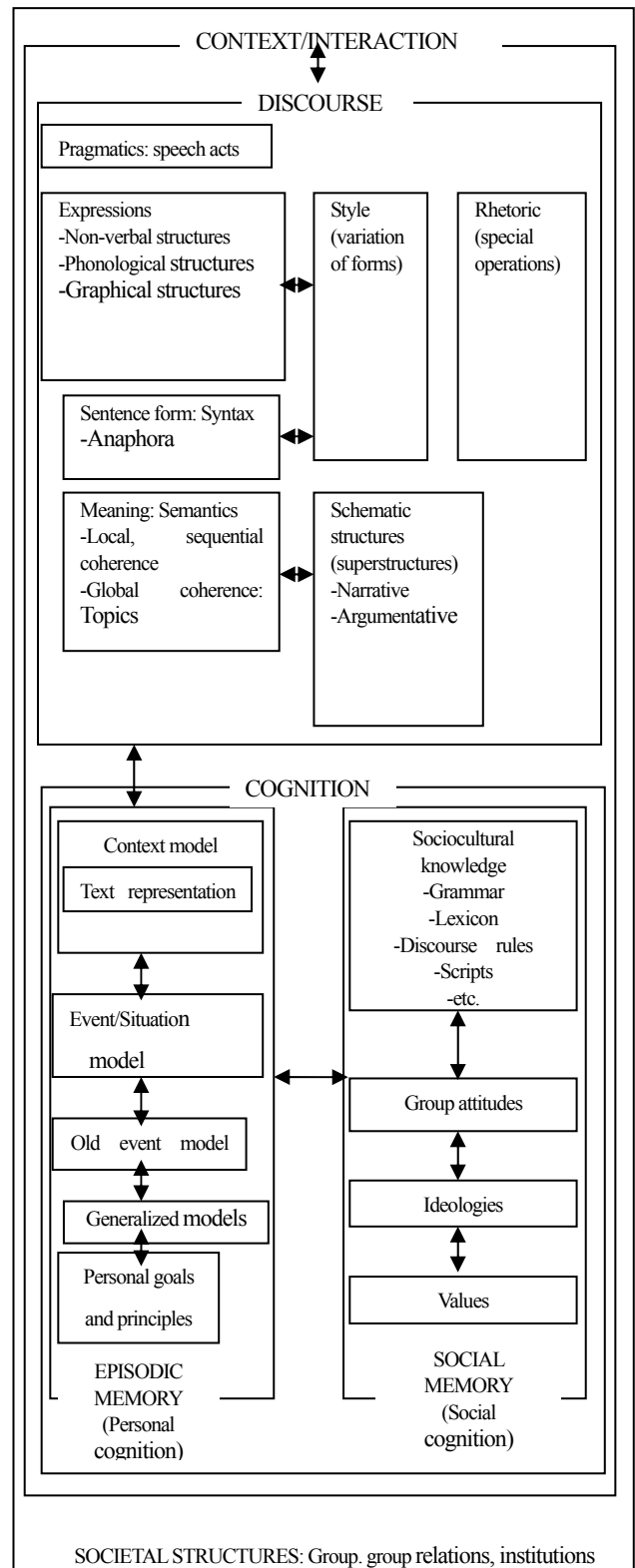


図 1 Schematic representation of the relations between ideologies (and other cognitions) and various discourse structures in their interactional and societal contexts.

4. 2. N. Fairclough のディスコース概念

ダイクと並ぶ CDA 論者のフェアクラフのディスコース論を検討する。彼はディスコースをとらえる鍵語として次のようなタームを提示する：(1) language use (2) social practice (3) order of discourse。ここでは、(1)および(2)について考察を加え(3)に関する考察は別稿で展開する。フェアクラフの CDA 論およびディスコース概念の際立った特徴は、テキスト資料などを言語学的な視点から分析をおこなっているが理論的背景となる根本思想は社会学、明記されていないがカルチュラル・スタディーズ、あるいは A・グラムシのヘゲモニー概念、M・フーコーの知／権力論を基にしていることである¹¹。この点において言語と社会的な不平等やイデオロギーへの関係に深い関心を示しながらも認知的なパラメーターを媒介して CDA 論を展開するダイクとは大きく異なる点である。権力論に深く関与するフェアクラフにとって、言語と社会の関係を論ずる社会言語学は批判の対象になる¹²。したがって、フェアクラフのディスコース論は社会言語学の一分野に属する「談話分析」のディスコース概念やダイクのそれとは大きく異なることが予想される。

フェアクラフのディスコース概念を吟味するに当たり彼の CDA 論の鍵語の一つ‘language use’（言語使用）が示す意味範囲の考察から始める。フェアクラフが使う「言語使用」の概念はいわゆるソシユールのいうラングやパロールではなくディスコース概念そのものである。このような記述が言語学的アプローチをとる分析者にとってある種の混乱を引き起こす。なぜならば、言語学の対象は伝統的にソシユールのいうラングであるからである。フェアクラフのディスコース観がいかに関言語学的な慣習における「言語」に対する理解と異なるものであるかを初めにおさえておかないと後のディスコース概念の議論における共通理解が円滑にいかなくなる懸念が生じる。以下、言語(language)に関するソシユールの観点とディスコースに関するフェアクラフの観点について要約する(Fairclough, 1989:20-22)。

- (ア) ソシユールはラングを実際の言語使用(language use)に優先する体系あるいはコードとしてみなす(p.20)。
- (イ) ソシユールにとってパロールは純粋に個人の選択によって決定されるものであり、けっして社会的に決定されるものではない(p.20)。
- (ウ) ソシユールはラングを一元的で均質なもの(something unitary and homogeneous)ととらえている(p.21)。
- (エ) ソシユールは言語コミュニティにおいて誰もがそのラングへの等しいアクセスと使用ができると想定しているが、現実には標準言語(standard languages)へのアクセスと使用は一樣ではない(p.21)。
- (オ) フェアクラフが「ディスコース」と呼ぶところの「社

会的に決定されたものとしてとらえられる言語使用」(language use conceived of as socially determined)に議論の力点をおくべきである(p.22)。

- (カ) フェアクラフは、慣習・慣行(conventions)は一元的で均質であると想定しないで、反対に相異や権力闘争によって特徴づけられているものとしてとらえる(p.22)。

以上の論点をさらに要約すれば、ソシユールのラング概念は一元的で均質なものであり、その言語コミュニティの中にいる者は誰でも自由に使用可能な言語であり、その意味で言語使用(language use)は社会的な力が関与する余地はない。それに対してフェアクラフは、現実の社会においては「一元的で均質な言語使用の環境のようなものはありえないと説き、「社会的に決定されたものとしてとらえられる言語使用」の概念を提示しそれを「ディスコース」と呼んだのである¹³。基本的にソシユールのラング概念こそが言語学の考察の対象となってきたゆえ、言語学のパラダイム下における社会言語学および談話分析はフェアクラフのいうディスコース概念を想定することはなかったのは当然なことである。

次にフェアクラフの二つ目の鍵語の‘social practice’（社会的実践）について言及する。フェアクラフはディスコースを社会的実践として明確にとらえる(discourse as social practice)[1989:22]。談話分析あるいは批判的ディスコース分析等の分野においてディスコースを社会と深く関係するものとして記述することはあっても大胆にもディスコースを「社会的実践」そのものであるとまでい切るような表現のされ方はけっしてありえなかった。言語学の訓練を受けた者にとってはフェアクラフのディスコース観を十分に理解することは難しいのではないかと危惧される。そのもっとも大きな理由はフェアクラフのいう「実践」(practice)というタームの意味の射程が社会学や言語哲学あるいはいわゆる現代思想の論究の文脈にまでおよぶものであり、その概念に対して表層的なとらえ方をすると肝心な意味の理解を大きくはずしかねないからである。ほかにも「イデオロギー」のようなタームについても同様なことがいえる¹⁴。

ダイクはディスコースをテキストあるいは話(text or talk)と簡潔にとらえた。それは談話分析による定義と重なり合うものでその意味で言語学の領域のなかで理解されるものである。ここで「テキスト」という用語が出てくるがフェアクラフはディスコースとの関係においてどのようにそれをとらえているのだろうか。その両者の関係を以下のように明確に述べている(Fairclough, 1989:24)。

A text is a product rather than a process - a product of the process of text production. But I shall use the term discourse to refer to the whole process of social

interaction of which a text is just a part. This process includes in addition to the text the process of production, of which the text is a product, and the process of interpretation, for which the text is a resource.

フェアクラフによればテキストは過程というよりもむしろ産物である。そしてディスコースという概念が社会的相互作用（テキストはそのなかの一部を占めるにすぎない）の全過程を指すものであると位置づけられる。その社会的相互作用の全過程とはテキストに加えて「生産」（テキストが産物）の過程および「解釈」（テキストが源）の過程の両方を含むものである。ディスコースの定義に関して、ダイクがディスコースを「コミュニケーション行為の産物(product)であり結果(result)」とみなしたディスコース観が静的であるのに対して、テキストの生産過程とテキストの解釈の過程の両者をディスコースとしてとらえるフェアクラフの観点はうごきを表しているといえる。このようなディスコースの動的なとらえ方こそがディスコースを社会的実践(social practice)そのものであるという見方に通じるものである。

フェアクラフは、'communicative event'という概念のなかでテキスト(text)、ディスコース実践(discourse practice)、および社会文化的実践(sociocultural practice)の3つの位相に分けてディスコース概念全体の考察をおこなっている。下図はフェアクラフのモデルを参照したものである(Fairclough, 1995:59 Fig.1)¹⁵。

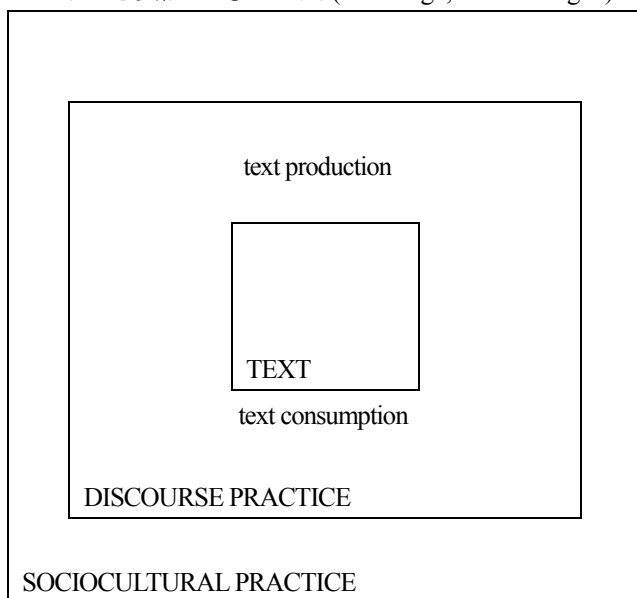


図2 A framework for critical discourse analysis of a communicative event

以下、語句の定義を概観しつつ図2について考察をおこなう。図における3つの次元（TEXT, DISCOURSE PRACTICE,

SOCIOCULTURAL PRACTICE）の用語は次のように定義される(Fairclough, 1995:57)。

<テキストの定義>

TEXT: 'Texts' may be written or oral, and oral texts may be just spoken (radio) or spoken and visual (television).

<言説実践の定義>

DISCOURSE PRACTICE: By 'discourse practice' I mean the processes of text production and text consumption.

「言説実践」(discourse practice)はディスコース概念そのものである。ディスコースは実践ともいえる（ディスコース=実践）。先にみたようにディスコースは社会的実践(social practice)として見立てられ、テキストの生産と消費の両方の過程を含む動的位相に属するものであるからである。

<社会文化的実践の定義>

SOCIOCULTURAL PRACTICE: And by 'sociocultural practice' I mean the social and cultural goings-on which the communicative event is a part of. mass communication as a particular type of situation, the economics of the media, the politics of the media, and the wider cultural context of communication in the mass media.

「社会文化的実践の」とは、たとえばメディアの経済学、メディアの政治学、およびマスメディア空間におけるコミュニケーションに関する広範な文化的文脈を指すものである。すなわち、テキストを生産したり消費（解釈）したりするための社会的な条件である¹⁶。そのような「条件」の場において始めてテキストは生産され消費されうるのである。仮にテキストがそのような場におかれなければ単なる物質としてのインクであり紙であるに過ぎないのである。たとえば、図書館に収蔵されている書籍や雑誌は来館者に閲覧が開放されており制度的に読まれるように条件づけられているといえる。実際にはいくつかの、あるいは多数の書籍が一度も読まれたり手にとられたりすることがなくてもその可能性が保証されていれば社会文化的実践と同次元に位置するものと解される。

再び、言説実践(discourse practice)にもどる。言説実践は図2のなかでテキストと社会文化的実践との中間に位置するものであり、両者を介在する重要な役割を果たす(Fairclough, 1995:59-60)。このことをさらに理解するためのディスコース概念として Chouliaraki & Fairclough (1999:38)からディスコースと社会的実践(social practice)に関する論考を引き出し以下吟味する。

We shall use the term discourse to refer to semiotic elements of social practices. Discourse therefore includes language (written and spoken and in combination with other semiotics, for example, with music in singing),

nonverbal communication (facial expressions, body movements, gestures, etc.) and visual images (for instance, photographs, film). The concept of discourse can be understood as a particular perspective on these various forms of semiotics — it sees them as moments of social practices in their articulation with other non-discursive moments.

上記引用文のなかで新たな用語として‘moment’ および ‘articulation’に注目する。とくに引用の最後の表現(‘— it sees them as moments of social practices in their articulation with other non-discursive moments’)が意味するものについて考える。Chouliaraki & Fairclough は ‘moment’ および ‘articulation’の概念の援用をラクラウ&ムフに負っている¹⁷。ラクラウ&ムフ(2000:169-170)によれば、節合(‘articulation’)や契機(‘moment’)の概念をディスコース概念とともに以下のように述べている。

…私たちが節合 (articulation)と呼ぶのは、節合的实践の結果としてそのアイデンティティが変更されるような諸要素のあいだに、関係を打ち立てるような一切の実践である。節合的实践から生じる、構造化された全体性を、私たちは言説と呼びたい。示差的な諸位[置]は、言説のなかで節合されているかぎり、契機と呼ばれる。それとは対照的に、要素とは、言説的に節合されていないすべての差異である。

上記引用を理解するために以下のような図を提示する。

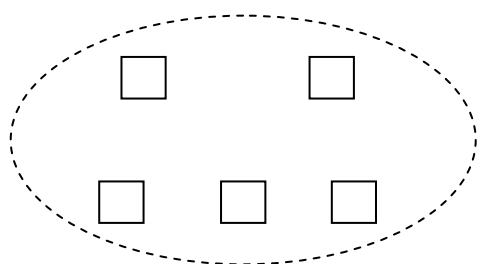


図3 諸要素(elements)の分散 [□は要素を示す]

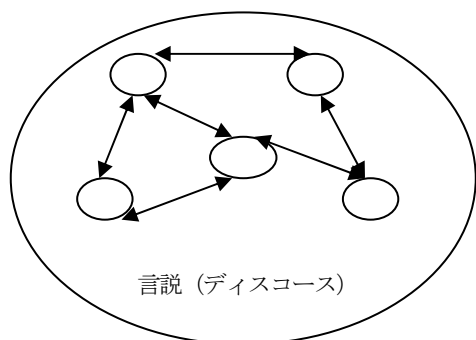


図4 諸契機(moments)の節合 [○は契機を示す]

図3は諸要素間にはなんら関係も結びつきもない状態でこのような諸要素が集まった空間はディスコースと呼ばれえない。それに対して、図4においては、諸契機どうしは関係し合い結ばれている(節合されている)。このような結びつきが節合的实践と呼ばれ「実践」の概念を表している。ここで、要素とか契機という用語が示す概念について具体的な例を呈示して議論をすすめたい。例えば、「要素」および「契機」として次のようなものを当てはめてみる。

要素1：ある特定の写真(どこに保管されたのかだれにもわからないが写真の存在は保証されていると仮定)

要素2：人間

要素3：ある特定のコンピュータ

これらの諸要素のあいだにはなんら節合的な実践はないといえる。人間(要素2)は写真(要素1)に接することはまずありえない(確率的にほんとうに接する可能性がゼロ%かとうかは留保)。コンピュータ(要素3)は写真(要素1)となんら結びつきもない。各要素間はばらばらに存在し関係し合わない。それに対し契機についてはどうであろうか。以下同様の例を示す。

契機1：ある特定の写真(ネット上で公開されている)

契機2：人間

契機3：ある特定のコンピュータ(インターネット機能有)

諸要素とちがって諸契機はそれぞれ関係し合っている。人間(元来は要素2)はコンピュータ(元来は要素3)を使用してある特定の写真(元来は要素1)を見るという行為が実現する。もともとは諸要素に属していたマテリアルなものの存在が互いに関係し合って新たなアイデンティティを形成し諸契機に変身する。ある特定の写真が人間(というよりも人)によってコンピュータ上で眺められているという関係が打ち立てられた状況こそが構造化された全体性であり言説(ディスコース)と呼ばれるものである。「要素」の段階では社会全体のなかでは不活性の状態であるが、「契機」のレベルになると活性化して諸契機どうしの節合関係が生じ、そのような諸契機の集まりを言説と定義しているのである。この言説(ディスコース)概念を通じてフェアクラブのいう言説実践(discourse practice)の意味がはじめて理解されるといえる。そうはいいいながらも「実践」という概念の理解は難しい。実践というと単なる行為のようなものとして理解されがちである。ところが、ここで使用される実践とは諸契機をむすぶ「節合的实践」のことを指すのである。この節合的实践の集合体が言説と呼ばれるのでありその意味で言説実践(discourse practice)の「実践」の意味が把握されるのである。

5. おわりに

本稿では「ディスコース」の表す意味についてあらたまって検討を加えた。広範に使用される語句は便利でもあるがどのような意味で使用しているのかの自覚が希薄になってしまう危険がみとめられるゆえ、「ディスコース」という語は研究者、とくに批判的ディスコース分析を扱う研究者にとって注意が必要である。そこで、辞書的な意味の概観から始まって「談話分析」におけるディスコース概念、CDAの二人の論者のディスコース概念を考察してきた。その結果、批判的ディスコース分析のダイクとフェアクラフでは同じように社会政治的な関心を有しながらもそのディスコース観には大きな違いがみとめられた。とくにフェアクラフの社会的実践(social practice)としてのディスコース概念は「節合」(articulation)概念等との結びつき、さらにはM・フーコーの知／権力論との関連で考察を深める必要を感じている。小論ではフェアクラフのCDAに関する鍵語として3つ提示したなかの最後のフレーズ'order of discourse'については扱わなかったが、その理由としてその概念がフーコーの言説概念(ディスコース)と密接に関係し、それじたいが大きな論考の対象になるからである。しかし、批判的ディスコース分析に携わる分析者はそのような論考は避けて通れないものであると考える。そうでなければ、権力作用とディスコースを結びつけて言語学的なアプローチをとるCDAのディシプリンとしての基盤が脆弱になりかねない。そして、社会学的アプローチをとる分析者からたえず批判(結果として議論のかみ合わない批判)を受けつづけ両者の対話の実現がいつそう困難になるであろう。最後に浅薄なディスコース分析の陥穽から逃れるためいかなる姿勢をもつべきかについて伊藤(2006:22)の説得力ある警告を紹介して本論を閉じる。

…分析が新聞やテレビを通じて「書かれたこと」や「言われたこと」、つまり言表の意味の解明という水準にとどまってしまう可能性や危険性が高いからである。ディスコース分析を志向する限り、個々の言表の意味の解明にとどまることなく、言表を一つの系に編制する法則を読み解く作業が求められる。そのためには、長期にわたるニュース・テキストの言表を収集しながら、ディスコースの変化を読み解く、途方もない時間と労力が必要となる。しかし、メディアの影響や効果を真正面から問題化しようとするならば、そうした作業が不可欠なのだ。

上記の声に対して批判的ディスコース分析に携わる者のひとりとして反省的に耳を傾けたい。上記引用中に「言表」「編制する法則」等フーコーの用語がみとめられる。本稿の後の研究課題として、「実践」概念とディスコース概念についてさらに考察をすすめて「節合」「契機」とともに知／権力論における言説編制

についても言及していきたい。

注

- ¹ 例えば、日本で批判的ディスコース分析の論考の例として斉藤(1998)があげられる。そのなかでVan DijkやN. Faircloughなどの主要な論者の論が紹介されている。90年代においては新たなパラダイムの紹介的な研究もありえたであろうが、現在ではディスコース概念についての再考も望まれる。
- ² Chouliaraki & Fairclough (1999:6-7)は批判的ディスコース分析が広範囲であり、フーコーの言説概念、サイドのオリエンタリズムにまでおよぶことを指摘している。
- ³ そのような特性を有したたちが日常的に見聞きする単語、「コミュニケーション」「アイデンティティ」等をウヴェ・ペルクゼン(2007)は「プラスチック・ワード」と呼ぶ。
- ⁴ その名詞形はラテン語の動詞'discurrere'から派生し、'dis-'は「離れて」(=[英]away)、'currere'は「走る」(=[英]to run)を含意。したがって、「本来の走路を離れて走る」の意で「あちこち走る」が原義であるが、それが「とりとめもないことが飛び回る」から転じて「とりとめなく話す」など談話、会話のような訳語が生じたものと思われる。英語の形容詞形'discursive'に「散漫な、とりとめのない」の訳がありラテン語の原義に近いものが残っている。
- ⁵ 『新スタンダード仏和辞典』(鈴木信太郎ほか著 大修館書店1987年)を参照。
- ⁶ ここで'social theorists and analysts'を「社会学者」と呼んでよいかどうかは別に議論されるべきことであるが、「言語学者」との対比により小論ではその名称を使用した。フェアクラフは前者の例としてFoucault(1972)とFraser(1989)を、後者の例としてStubbs(1983)とVan Dijk(1985)を挙げている。
- ⁷ Van Dijkを「ヴァン・ダイク」あるいは「ヴァン・デイク」と呼称されるがここでは前者の表記を用いる。
- ⁸ Van Dijk (1988)はテキストの産出・受容の認知的プロセスについて言語使用とコミュニケーションの社会文化的次元における論考を試みて、とくにニューステキストとコンテキストとのあいだの関係を論じている。
- ⁹ 伊藤高史(1994:13)は、ダイクの方法論を、ニュース・テキストを構成する「文法」に関心を集中させるディスコース分析としてとらえ、「一つのテキストを通じて生産される意味を理解する場合に、そのテキストを取り巻く全体的な状況を描くことで明らかにしようとする」アルチュセールの方法とのスタンスの相違について批判的に言及している。このように社会学者(マス・コミュニケーション研究)から見ると、テキストを取り巻く全体的な状況(イデオロギー、権力行使等を内包した社会的状況)を解析するための方法として言語的アプローチに専心するダイクの方法は批判されるのである。
- ¹⁰ Van Dijk (1995:254)で示されたFIGURE 1を簡略化したものをここでは提示した。
- ¹¹ カルチュラル・スタディーズそのものへの言及は明示的おこなわれていないが、社会的実践(social practice)を論じるCDA論(Chouliaraki & Fairclough, 1999)とラクラウ& ムフ(2000)の節合概念を援用しているHall(1980)の論とのあいだに近接性がみとめられる。
- ¹² フェアクラフはLanguage and Power (1989:1)の冒頭で社会言語学批判を展開している(Linguists and especially those

working in sociolinguistics (which is often said to deal with 'language in its social context') have had quite a lot to say about language and power, but they have not in my opinion done justice to the rich and complex interrelationships of language and power.).

¹³ フェアクラフは「ディスコース」を抽象名詞および可算名詞としてそれぞれ分けて論じている。前者は社会的実践としての言語使用(language use conceived as social practice)であり、後者はある特定の観点からの経験の表し方(way of signifying experience from a particular perspective) [Fairclough, N.(1993:138)]を指す。

¹⁴ 注3のプラスチック・ワードを参照。

¹⁵ 図2に先立ちフェアクラフは、*Language and Power* (1989:25)においてディスコースとテキストに関する同様の関係図を提示しているが、図2の SOCIOCULTURAL

PRACTICE の代わりに'Context'を、DISCOURSE PRACTICE の代わりに'Interaction'の用語を当初使用していた。また、'text consumption'の代わりに'Process of interaction'を、'text production'の代わりに'Process of production'を使用していた。

¹⁶ Fairclough(1989:25)のFig.2.1において社会文化的実践の位相に相当する'Context'の特性として、'Social conditions of interpretation' および'Social conditions of production'を示している。

¹⁷ カルチュラル・スタディーズにおいてもこれら両ターム(moment, articulation)が用いられている(Hall, 1980)。

参考文献

- 赤川学(2001)「言説分析と構築主義」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房、p.63-83。
- 伊藤高史(1994)「アルチュセールのイデオロギー論とディスコースの理論、およびその方法について」『マス・コミュニケーション研究』44号、pp.1-14。
- 伊藤守(2006)「ニュースのディスコース分析、マルチモダリティ分析」、伊藤守『テレビニュースの社会学——マルチモダリティ分析の実践』世界思想社、pp.15-36。
- ウヴェ・ペルクゼン(2007) 粕谷啓介訳『プラスチック・ワード 歴史を喪失したことばの蔓延』藤原書店。
- 斉藤正美(1998)「クリティカル・ディスコース・アナリシス——ニュースの知/権力を読み解く方法論——新聞の「ウーマン・リブ運動」(1970)を事例として」『マス・コミュニケーション研究』第52号、88-103。
- スタッブズ、M.(1989)南出康世、内田聖二共訳『談話分析：自然言語の社会言語学的分析』研究社出版。
- 野呂香代子(2001)「クリティカル・ディスコース・アナリシス」野呂香代子・山下仁編著『「正しさ」への問い 批判的社会言語学の試み』三元社 2001年 p.13-49。
- ラクラウ、E & ムフ、C.(2000)山崎カヲル、石澤武訳『ポスト・マルクス主義と政治：根源的民主主義のために』復刻新版、大村書店。
- 小西友七・南出康世編集主幹(2001)『ジーニアス英和大辞典』大修館書店。
- 新村出編(1998)『広辞苑』第5版 岩波書店。
- 鈴木信太郎ほか著(1987)『新スタンダード仏和辞典』大修館書店。
- 田中秀央(1966)『羅和辞典』研究社。

- Chouliaraki, L. & Fairclough, N. (1999) *Discourse in Late Modernity: Rethinking Critical Discourse Analysis*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Fairclough, N.(1989). *Language and Power*, London: Longman.
- Fairclough, N.(1993) 'Critical Discourse Analysis and the Marketization of Public Discourse: the Universities', *Discourse & Society* 4(2): 133-168.
- Fairclough, N.(1995) *Media Discourse*. London; New York : E. Arnold.
- Fasold, R. (1990) *Sociolinguistics of Language*. Oxford: Blackwell.
- Foucault, M. (1972) *Archaeology of Knowledge*. London: Tavistock.
- Fraser, N. (1989) *Unruly Practices : power, discourse and gender in contemporary social theory*. Cambridge: Polity Press.
- Hall, S. 1980. 'Encoding/decoding' in S. Hall (ed.) *Culture, Media, Language: working papers in cultural studies, 1972-1979*. 128-138. London: Centre for Contemporary Cultural Studies, University of Birminham.
- Hurford, J. and Heasley (1983) *Semantics: a Coursebook*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Laclau, E. and Mouffe, C. (1985) *Hegemony & Socialist Strategy: towards a radical democratic politics*. translated by Winston Moore and Paul Cammack, London : Verso.
- Schiffrin, D. (1994) *Approaches to Discourse*. Cambridge, Mass. ; Oxford, UK : Blackwell.
- Stubbs, M. (1983) *Discourse Analysis The Sociolinguistic Analysis of Nature Language*. Oxford: Basil Blackwell.
- Van Dijk, T.A. (1985) *Handbook of Discourse Analysis* (4

- vols). London: Academic Press./ edited by Teun A. van Dijk London ; Tokyo : Academic Press , 1985
- Van Dijk, T.A. (1988) *News as Discourse*. Hillsdale, NJ.: Lawrence Erlbaum Associate.
- Van Dijk, T.A. (1993) 'Principles of Critical Discourse Analysis', *Discourse & Society* 4(2): 249-283.
- Van Dijk, T. A. (1995) 'Discourse Semantics and Ideology' *Discourse & Society* 6(2): 243-289.
- Van Dijk, T. A. (1998) *Ideology : a multidisciplinary approach*. London : SAGE publications.
- The Oxford English Dictionary* [Second Edition] Volume□, prepared by J.A. Simpson and E.S.C. Weiner. 1989 Oxford: Clarendon Press.
- The Pocket Oxford Latin Dictionary*. Edited by James Morwood. Oxford : Oxford University Press.

(提出期日 平成 19 年 11 月 26 日)